

目次

凡例	xiii
----	------

序章 狂言のことば

——その特質と研究状況——	1
一 はじめに	1
二 狂言の歴史と台本の成立	1
三 本書で資料とした狂言台本の底本等	8
四 狂言のことばの研究状況	14

第I部 狂言台本の資料性の考察

第一章 言語資料としての天理本『狂言六義』	21
-----------------------	----

第一節 『狂言六義』 上巻から下巻にかけての言語の変容	21
一 はじめに	21
二 ゴザアル・ゴザル等の分布と用法	22
二・一 ゴザアルとゴザル	22
二・二 ゴザナイとゴザラヌ	28
二・三 オリヤル・オデヤル・オリナイ	29
三 マラスル・マスルの分布と用法	32
四 サラバ・サアラバとソレナラバ	37
五 おわりに	40
第二節 「本文」「抜書」の成立とその詞章	45
一 はじめに	45
二 「本文」と「抜書」との関係	45
三 「本文」と「抜書」の筆録者をめぐって	48
四 「本文」と「抜書」共通詞章の異同について	54
五 おわりに	61
第三節 『狂言六義』の筆録者再考	63
一 はじめに	63

二	〔C〕〔D〕〔E〕の筆跡と和泉家古本「拔書」の筆跡の検討	64
三	問題点の検討	69
四	おわりに	77
第二章 言語資料としての和泉家古本『六議』		
一	はじめに	81
二	ゴザアル・ゴザル等の用法	82
二・一	ゴザアルとゴザル	82
二・二	ゴザナイとゴザラス	85
二・三	オリヤル・オデヤル・オリナイ	87
三	マラスル・マスの用法	90
四	サラバ・サアラバとソレナラバ	95
五	おわりに	97
第三章 『大蔵能狂言』における衍字・脱字の校訂について		
一	はじめに	101
二	衍字の校訂について	103
三	脱字の校訂について	106
三・一	語の一部を補入したもの	106

三・二	一語全体を補入したもの	109
四	おわりに	116
第Ⅱ部 狂言台本を対象とする語彙・語法の研究		
第四章 話す行為を表すことばの待遇的考察		
——大蔵虎明本を中心に——		
一	はじめに	121
二	尊敬表現に関して	122
三	いわゆる謙讓表現（受け手尊敬）に関して	127
四	おわりに	133
第五章 天理本『狂言六義』の用語		
一	はじめに	137
二	近世的用語・俗語的用语	138
二・一	前世（ゼンゼ）	138
二・二	はっさい〔発才〕	139
二・三	時刻	140

第六章	版本狂言記の言語	173
第一節	二段活用的一段化	173
二・四	あせらかす	141
二・五	ありやかる〔有り明かる〕	142
二・六	負ひ越やす	144
二・七	かぶらかす	145
二・八	きする〔たたく、の意〕付、病ます	146
二・九	取り替ふる	149
二・一〇	さんばい	151
二・一一	たて物	153
二・一二	のどびえ	154
二・一三	人そばへ	154
二・一四	振り当たり	155
二・一五	〔妻の呼称〕妻 ^め ちや者・宿守・子持ち・かか（囃）	156
二・一六	〔代名詞〕あん（に）・うぬし・これん	159
三	四段活用動詞＋サセラルル	161
四	おわりに	168

一	はじめに	173
二	会話文の場合	177
二・一	上二段活用動詞の一段化	177
二・二	終止・連体形と已然形	178
二・三	助動詞の一段化	180
二・四	語による一段化傾向の遅速	184
三	謡・語り及びト書きの場合	190
四	おわりに	192
第二節	ゴザル・オリヤル・オヂヤルとその否定表現形式	201
一	はじめに	201
二	ゴザル・ゴザアル・ゴザナイの分布と用法	201
二・一	ゴザアルとゴザル	203
二・二	ゴザリマス(ル)とマシテゴザル	204
二・三	ゴザナイとゴザラス	206
三	オリヤル・オヂヤル・オリナイの分布と用法	209
三・一	ゴザルとオリヤル・オヂヤル	211
三・二	オリヤルとオヂヤル	212
三・三	オリナイ・オリヤラス・オヂヤラス	217
四	おわりに	222

第七章	固定期狂言台本における「ゴザリマスル」	225
一	はじめに	225
二	ゴザリマスルの出現と発達	226
三	大蔵流台本におけるゴザルとゴザリマスル	230
三・一	虎寛本・山本東本・茂山家本の場合	230
三・二	大蔵八右衛門派台本の場合	235
四	和泉流・鷺流台本におけるゴザルとゴザリマスル	237
五	おわりに	242
第八章	大蔵虎光本狂言集の本文の異同について	245
第一節	待遇表現に関して	245
一	はじめに	245
二	虎光本系諸本とその性格	246
三	丁寧語に関する異同について	249
三・一	ゴザルとゴザリマスル	249
三・二	ゴザルとオリヤル	251
三・三	マスル	256
四	尊敬語・謙讓語に関する異同について	258

四・一	シメ・サシメ	258
四・二	ル・ラルとセラル・サセラル、その他	259
四・三	代名詞・接頭語、その他	260
五	おわりに	261
第二節 文法的事象に関して		
一	はじめに	263
二	仮定条件の接続詞について	266
三	語形の異同	268
三・一	活用形等	271
三・二	音便形	273
四	助動詞・助詞の異同	273
四・一	助動詞ウ・ウズ及びヌとン	273
四・二	格助詞	274
四・三	係助詞	277
四・四	接続助詞	278
四・五	終助詞	280
五	おわりに	281

第三節 疑問詞疑問文における終助詞「ゾ」……………285

一 はじめに……………285

二 狂言台本における疑問詞疑問文……………285

三 疑問断定表現について……………288

三・一 A型の場合……………288

三・二 B型の場合……………289

三・三 C型の場合……………291

四 平叙疑問表現について……………291

四・一 D型の場合……………292

四・二 E型の場合……………293

四・三 F型の場合……………295

五 おわりに……………296

第Ⅲ部 狂言台本その他を資料とする語史・語法史研究

第九章 「ウゴク（動）」と「ハタラク（働）」

—— 中世における意味変化を中心に ——……………303

一 はじめに……………303

二	「ウゴク」「ハタラク」の成立と意味関係	303
三	中世における「ウゴク」「ハタラク」	307
三・一	『今昔物語集』の「動」字の訓	307
三・二	説話集その他における様相	309
三・三	「動」字の訓と「働」字の成立	312
三・四	軍記等における展開	312
四	《労働》の意味の成立と「ハタラク」の意味変化	318
五	おわりに	321
第十章	慣用表現の成立と展開	325
第一節	「憎まれ子世にはばかる」考——ハバカル・ハビコル・ハダカル——	325
一	はじめに	325
二	ハバカルの意味解釈	326
三	ハバカル・ハビコルの語史	329
四	ハダカルとの関連	336
五	おわりに	340
第二節	「真つ赤な嘘」考——マツカナ・マツカイナ・マツカイサマナ——	343

一	はじめに	343
二	「マツカナ嘘」と「マツカイナ嘘」	344
三	マツカヘサマ・マツカイサマ	348
四	マツカイナの成立と意味の変容	351
五	おわりに	356
第三節	「(言わ) んばかり」考——成立過程と現代語への流れ——	361
一	はじめに	361
二	「ンバカリ」の解釈	361
三	「ヌバカリ」等諸形式の成立と発達	364
四	近代語における「ヌバカリ」「ンバカリ」等	371
五	「ムヴン」「ヌヴン」の変化による同音衝突	373
終章	まとめ	379
引用・参考文献		387
小林賢次自筆書き入れより(編者の解説を含む)		393
所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第三卷)		406

本書所収の論文解説と未来への展望		(その一)	小林 正行	407
編者のことば		(その二)	山田 里奈	414
賢草日本語研究会より御礼のことば			小林 千草	421
				430

凡 例

- 1 研究書として刊行されたもの（「初版本」と称する）を根幹に、既発表論文を研究テーマごとに巻を分けて構成している。
- 2 初版本の論文体裁を尊重しており、編者の統一は、【注】表示のあり方など、ごくわずかである。
- 3 編者の統一を控えた理由は、三〇〜四〇年にわたる研究論文執筆において、論題や扱う資料によってその文体や表示面に変容が生じるのは自然の流れであると考えられるからである。また、機械的な統一によって、その論文本来のもつ「調和」をそこないたくなかったからでもある（ただし、数字の表記方法など最低限の統一については、読みやすさを考慮し、編集部のほうで手を加えた箇所がある）。
- 4 小林賢次は縦書き派であったので、横書き（横組み）で出版された一部の論考については、縦書きに直している。
- 5 引用・参考文献の挙げ方にも、古いものと新しいものとは変容が生じているが、初出、あるいは、初版本のままを反映している（ただし、編集部のほうで可能な限り形式の整理をおこなった）。
- 6 初版本に小林賢次自筆の書き入れがあるものについては、「小林賢次自筆書き入れより」という一項目を設けて、参考にする。
- 7 初版本に誤植等、すでに小林賢次によって朱が入っているものは、6の扱いをせず、訂正された形を本文上に反映させている。

序章 狂言のことは

——その特質と研究状況——

一 はじめに

本書は、狂言台本を主資料とし、その他中世から近世にかけての口語文献を資料として、特に語彙・語法（文表現・敬語などを含む）の各方面から、近代語成立過程期における史の変遷の様相を考究しようとするものである。狂言台本を言語資料として利用し、中世語・近世語のさまざまな問題を考察することが一つの目標であるが、そのためには、狂言台本のそれぞれが、流派や時代的な相違により、いかなる言語的な性格を有しているか、言語資料としての狂言台本の資料性を明らかにする必要がある。この両面は相互に関連するものであり、本書では、「第一部 狂言台本の資料性の考察」、「第二部 狂言台本を対象とする語彙・語法の研究」の両面から考察を行い、最後に、その発展として、「第三部 狂言台本その他の資料とする語史・語法史研究」を位置づけたいと思う。

二 狂言の歴史と台本の成立

まず、本書において中心資料とし、考察の直接の対象でもある狂言のことはについて、諸台本の成立の状況、また、それらの公刊やそれに基づく言語資料としての研究状況について、はじめに概観しておきたい。

中世、南北朝時代に成立し、能とともに発展してきた狂言のことばが、抄物やキリシタン文献等と並んで、中世語あるいは中世から近世にかけての言語資料として重要な位置を占めていることは、改めて言うまでもないであろう。登場人物が多彩で、身分関係が明確であること、対話劇の形で進行し、場面・状況が分明であることから、口語資料としての価値はきわめて高いものといえる。中でも代名詞の諸相、待遇表現などの研究にはまさに恰好の資料とされるのである。

しかしながら、成立当初の狂言は即興的な性格の強いものであり、台本を書き留めることも普通なかったらしい。現在残っている台本は、すべて室町時代の末以降、むしろそのほとんどは江戸時代になってから書写されたものである。小山弘志氏は、狂言の歴史について、台本の成立事情を基準として次のように区分している（小山（一九五六））。

成立・流動期 十四世紀半ば―十六世紀半ば（天文頃）までの二百年

筋書・台本定着期 十六世紀半ば―十七世紀半ば（寛永頃）までの百年

台本固定・伝承期 十七世紀半ば―現代までの三百年

この分類は妥当なものとしてその後広く通用しており、本書でもこの名称を用いることにする。⁽¹⁾筋書・台本定着期の設定時期について、小山氏は、「常の能会の記録に狂言曲名が見えること」と、「狂言師の家がこの頃から確認し得ること」の二点によるとする。狂言台本として最古のものは、天正六年（一五七八）の奥書（ただし、本文とは別筆とみられる）を持つ天正狂言本（二冊、一〇三曲。野上記念法政大学能楽研究所蔵）である。この天正本は、簡単な筋書きに謡い物・語り・和歌などを記したものであり、構成上も未発達な要素が多く、狂言が各流派に分かれて独自の発展をとげる以前の状況を示すものとみられている。まさに初期の台本の状況をうかがわせるものである。各種の音の転化形や東国の特徴の見られることなど、言語資料としても興味深い特徴が認められ、言語面からの研究成果も多い。ただし、具体的なせりふを欠いているため、話しことばの資料とするには限界がある。

台本定着期の本格的な活動は近世初期のこととなる。天正本に次ぐものとして、近年、祝本^{いわい}狂言集（一冊、二三曲。法政大学能楽研究所〈鴻山文庫〉蔵）の存在が知られるようになった。この祝本は慶長から寛永初年頃の間の書写と推定されている。天正本と同様、流派に分かれる以前の狂言の姿を伝えるものであるが、近世初期の俗語的な語句の使用が多く、曲数は少ないが、言語資料としても貴重である。

中世から近世にかけて大蔵・和泉・鷺の三流が確立し、お互いに影響を受けながらも、異なる演出、異なる詞章を伝承するに至る。近世初期には、大蔵流は金春座付、鷺流は観世座付として、また、和泉流は尾張徳川藩の抱えとして、それぞれ活躍していたという。大蔵流では虎明本^{とらあきつ}（寛永十九年（一六四二）大蔵虎明書写、八冊。本狂言、万集類所収の六曲を含め二三七曲。大蔵宗家蔵）、虎清本^{とらきよ}（正保三年（一六四六）大蔵清虎書写、虎清手訂、一冊。本狂言八曲。法政大学能楽研究所〈鴻山文庫〉蔵）の筆録⁽²⁾がなされた。虎明本は大蔵流十三世宗家、大蔵弥太郎（のち弥右衛門）虎明の手になり、狂言の類別や詞章の整備された台本として、第一級の資料と言うことができる。また、虎清本は、その父、十二世仙溪道倫虎清が、自らの最晩年に、虎明の異母弟八右衛門清虎に書写させ、手訂を加えたものである。虎清はすでに自ら筆をとることができない状態で、奥書まで代筆させている。虎清本の方が虎明本よりも四年のちに書写されているのではあるが、言語的には「ゴザル」よりも「ゴザアル」を多用し、「マスル」を用いず「マラスル」専用であるなど、むしろ虎明本よりも古態を示す点で注目されている。虎清の愛護を受けた清虎は分家独立し、以後八右衛門家として独自の活動を続けることになる。宗家たる虎明の筆録した虎明本においても、虎清は正保二年正月に「右書所従古来雖為口伝末代退転為無之筆載者也我家代々相伝之所一字モ相違依無之令加判畢」という奥書を加え、証本としての保証を与えているのであるが、虎清本所収の八曲を虎明本と比較すると、実際にはさまざまな相違のあることが指摘されている。したがって、「我家代々相伝之所一字モ相違依無之」と言いながら、その伝承は必ずしも固定したものではなく、まさに流動的なものであったと想像される。以上により、こ

の虎明本と虎清本の詞章の比較は、狂言台本の資料性を考察する上で、重要な意味を持つものとして位置づけられる。

和泉流では、本書において特にその資料的性格を具体的に問題とする天理本『狂言六義^{りくぎ} 上・下・抜書』（寛永末から正保頃書写。上・下冊二二曲及び「抜書」所収曲五曲。天理図書館蔵）が筆録されている。従来、山脇和泉初代（七世）元宜道仙、または二代（八世）元永道意いずれかの手になるものと考えられてきたが、筆録者は複数であり、その観点からとらえる必要がある。その成立事情については第一章（特に第三節）で考察する。この近世初期までが筋書・台本定着期ということになる。大蔵虎明本において、狂言の類別も整理され、せりふも詳細に書き留められて台本としての整備が認められるのに対して、和泉流の天理本では、筋書を主としてせりふを取り込んでいく形をとっており、台本としての完成度はいまだ十分なものとはなっていない。しかしながら、天理本の場合、筋書・台本定着期の狂言の様相を生き生きと伝える台本として、その資料的価値は大蔵虎明本にも比肩しうるものである。

これらの台本は、さまざまな点で流動的な要素を多くとどめており、中世、室町時代のことばを伝承していると思われる点が多い。しかし、また一方では、書写当時、すなわち近世初期の日常語の影響を受けたと思われる点もあり、舞台言語として、狂言の詞章が固定化・類型化する兆候もすでにうかがわれる。したがって、中世から近世にかけての言語資料として狂言台本を利用しようとする場合、それぞれの台本の狂言史上における位置を踏まえた上で、他の台本における様相と慎重に比較考察していくことが不可欠となるのである。

台本固定・伝承期とされる十七世紀半ば以降になると、和泉流では、天理本に引き続くものとして、和泉家古本『六議』（承応二年（一六五三）～元禄六年（一六九三）山脇和泉家三代元信道甫の筆録と推定されている。「六議」第三冊目を欠き現存七冊、一五三曲。和泉宗家蔵）の筆録がなされ、狂言の類別による分類、演出やせりふの整備がなされるよう

になる。この和泉家古本の筆録は、天理本から大きく隔たるものではなく、近世前期の和泉流の様相を知るために貴重なものである（実は元信道甫は天理本の筆録にもかかわっている。第一章第三節及び第二章参照）。

近世中期においては、弟子家筋の波形本（天明六年（一七八六）の記事があり、この頃成る。早川幸八書写、一六冊、二五四曲。名古屋狂言共同社蔵）があり、弟子家本としての独自性をもみせるといふ（池田廣司（一九六七）参照）。また、文政年間（二八一八―三〇）には、七代山脇和泉元業が筆録し、種々の改訂を行ったという雲形本（二〇冊、二〇〇曲。狂言共同社蔵）があり、その転写及び増補本文を明治期に書写した古典文庫本（二〇冊、二〇〇曲。吉田幸一氏蔵）がある。なお、雲形本には別編のもの、大本等もあり、別編の曲に関しては、雲形本研究会「雲形本・別編『狂言六義（一）』（武蔵野女子大学能楽資料センター紀要）九号（一九九八）、一〇号（一九九九）に翻刻されている。また、波形本と雲形本との中間に位置するものとして、和泉流秘書（一冊欠き六冊、一二七曲。愛知県立大学附属図書館蔵）があり、その一部が島津忠夫・野崎典子編『和泉流狂言選愛知県立大学附属図書館蔵』（和泉書院、一九八〇）等に影印刊行されている。

一方、大蔵流では、虎明本がかなり完成度の高いものであったせいか、その後の代表的な台本の筆録としては、近世後期（近世を前期・中期・後期の三期に分ける分類に従うと、中期の終わり頃となる）、固定・伝承期の虎寛本（寛政四年（一七九二）大蔵虎寛書写、一六五曲。大蔵宗家蔵）を待たなければならぬ。虎寛本の奥書には、寛政四年に奈良に旅行するに際して、「ふるきより伝ふる本」が大形で携帯に不便なため、「旅にたより能らん事を思ひて」書写したものだとして述べている。これに関して、笹野堅氏は、「近世初期、虎明本が書写されてから間もなく、大蔵流の狂言に近世的な刪定が加へられ、整備されたものを書留めたのがこの大本であつたらしく思はれる。」（『大蔵本能狂言』解説、上巻七七―七八ページ）と述べている。すなわち、虎寛本の詞章の成立は、寛政四年という書写時よりかなりさかのぼることも想定されるのである（第三章参照）。

この筋書・台本定着期を代表する虎明本・虎清本と台本固定・伝承期を代表する虎寛本との相違については、狂言のことばの推移をとらえる上で、基本的なものとして従来から研究が積み重ねられてきている（蜂谷清人〈一九七七〉「国語学的研究の展望と文献目録」など参照）。中世語の性格をとどめたものという点では、当然虎明本・虎清本を重視すべきであり、近世における詞章の整理・改訂の手が加わった虎寛本などは、比較資料としての位置にとどめなければならぬ（以前は台本の公開がおくれていたこともあって、たとえば虎寛本の本文のみを調査して、それを「中世語研究」と称するようなことも行われてきたが、現在ではそのような扱いは論外である）。しかし、虎明本・虎清本から虎寛本へとこの推移を言語面から追究することは、流動変化する狂言台本の言語の性格をとらえる上で大きな意味を持つのである、今後とも一つの中心的な課題として位置づけられるであろう。

これに対して、大蔵八右衛門清虎以来の分家、大蔵八右衛門家の台本として、伊藤源之丞本（宝暦・明和〈一七五〇〜一七五二〉頃、伊藤源之丞吉高書写。一七冊、一七〇曲。広島県宮島歴史民俗資料館寄託）が発見・紹介され、また、文化十四年（一八一七）に虎光が筆録した虎光本の写本が近年翻刻されている（虎光本の原本は発見されていないが、その転写本数種が伝わる）。同じ大蔵流にありながら、宗家との詞章の相違などもさまざまに認められ、狂言詞章の伝承の多彩さを物語るものとして注目されるところである（第八章参照）。

鷺流では、台本の筆録はややおくれているが、宗家の仁右衛門派の延宝忠政本（延宝六年〈一六七八〉忠政書写、一冊、二五曲。田口和夫氏蔵）が近世前期に、分家伝右衛門派の享保保教本（鷺伝右衛門保教が享保九年以前〈一七一六〜二四〉に書写し、詳細な注記などを施した大冊四冊、本狂言一五〇曲。天理図書館蔵）が近世中期に筆録されている。その他、宝暦名女川本（宝暦十一年〈一七六一〉頃名女川辰三郎書写〈伝右衛門派〉、一二〇曲。檜書店蔵）、安永森本（安永六年〈一七七七〉森藤左衛門書写〈仁右衛門派〉、一〇一曲。法政大学能楽研究所蔵）、寛政有江本（天明八年〜寛政二年〈一七八八〜九〇〉有江九十郎書写〈仁右衛門派〉、一五九曲。観世宗家蔵）、文化小杉本（文化年間、鷺賢茂書写〈仁右衛門派〉、

一九一曲。中村保雄氏蔵）、野中本（嘉永四年（一八五二）頃野中儀右衛門書写（伝右衛門派）、一三四曲³。実践女子大学蔵）、安政賢通本（安政二年（一八五五）鷺健次郎賢通書写（仁右衛門派）、一九二曲。田中充氏蔵）、など多数の台本が筆録されている。ただし、鷺流は明治期に宗家を廃絶し、弟子筋が地方において伝えるのみとなる（山口県及び新潟県佐渡には現在も伝承されており、『山口県指定無形民俗文化財 鷺流狂言』（山口市教育委員会、一九八二）などの翻刻がある）。以上、鷺流狂言については田口和夫（一九九七）など第四節に所引の文献を参照して記述した。成立年代の推定、あるいは曲数の数え方など小異があるが、ここでは特に問題としない。本書においては十分な考察ができなかったが、大蔵流に対抗してその演出や詞章について詳細な記述を行っている保教本などは、言語的にもきわめて興味深い性格を有している（蜂谷（一九九八）第二章参照）。

以上の三流のほかに、群小諸派の活動があったことが知られている。近世前期から中期にかけて刊行された版本狂言記は、そうした台本をもとしたものかという。版本狂言記の刊行は『狂言記（正篇）』（万治三年（一六六〇）初版。五〇曲）を始めとして、元禄十三年には『狂言記（外五十番）』（五〇曲）及び『続狂言記』（五〇曲）が刊行され、のち、『狂言記拾遺』（享保十五年、五〇曲）が刊行されて計二百曲が収録されている。これら四種の版本狂言記は、書名に「絵入」の名を冠しているように、挿絵を付し、一般の読物としての需要にこたえて刊行されたものである。版本狂言記の言語の状況は、狂言のことばの伝承としてはかなり異質であり、俗語的な性格の強さも指摘されている（特に『狂言記（正篇）』の場合）。その点で、大蔵流や和泉流における正統的な台本の伝承の状況と対比することにより、文体・位相面などでまた新たな問題を提起するものとなっている（第六章参照）。

以上、本書で資料として取り上げるものを中心として、ごく一部のものを示した。狂言台本の諸本を広く示した橋本朝生編「狂言台本・曲目所在一覧」（橋本（一九九七）に付載）によると、ある台本の転写本、あるいはごく一部の

曲のみの台本なども含めると、多数の台本が現存していることが知られる。ただし、資料として中心となるのは、かなり限られたものとなるとみてよいであろう。現在、影印あるいは翻刻による狂言台本の公刊が進められているが、言語資料としては、さらに多くの台本に関して特に影印による公開が望まれる。

いずれにしても、狂言台本は、その性格上、ある特定の一時期の話しことばを直接的に反映したものではない。言語資料、特に中世語資料としてはある意味では不確実なものである。しかしながら、逆に言えば、それぞれの台本は中世から近世にかけてのさまざまな言語的事実を内包しているわけであり、研究対象としての魅力に富んでいる。中世語をどのように伝承し、時代の推移とともに、近世語をどのように反映するに至ったのか、また、舞台言語としての洗練・統一の方向から、どのように詞章の改訂・整備がなされてきているのか、あるいは、流派間の詞章の影響はどのようなものであったのか、——従来の研究を継承し、発展すべき課題はきわめて多いのである。

三 本書で資料とした狂言台本の底本等

次に、これら狂言台本の公刊状況についてみておこう。まず、前節で取り上げた台本のうち、おもなものについて公刊状況を一覧にしたのが次ページの表である。これは天理図書館善本叢書『鶯流狂言伝書保教本』（一九八四）所載の田口和夫氏の「解題」（池田（一九六七）に鶯流台本を加えて作成したものという。田口（一九九七）に一部訂正の上所収）をもとに「影印・翻刻・総索引・校注」の状況が一览できるように筆者（小林）が補ったものである（成立年などは、筆者の判断によった場合がある）。